

ゆめあわせ 「円地蔵尊」と地蔵信仰

豊田 祥子

はじめに

「円地蔵菩薩縁起」（山伏山町文書別置、史料翻刻⑥）は、現在、山伏山町内に安置されている地蔵菩薩（以下、地蔵とする）がどのように伝来したのかを記した由来書であり、江戸時代に作成されたと考えられる。全体的に地蔵のもつ御利益を説いたものであるが、本文は大まかに以下の5つの段落に分けることができる。

- ① (5) 頁下段史料1行目から。仏教における地蔵の徳の高さを謳ったもの。
 - ② (5) 頁下段9行目から。地蔵が現在の勘解由小路町に安置されるまでの由来。
 - ③ (5) 頁下段14行目から。承久年間（1219～1221）に起こった、地蔵にまつわる逸話。
 - ④ (6) 頁上段11行目から。応仁の乱（1467～1477）以降、円空上人が地蔵を山伏山町に安置した経緯。
 - ⑤ (6) 頁上段24行目から。地蔵の御利益と、「円地蔵菩薩縁起」が記されることとなった理由。
- 次章より、この5つの段落ごとに内容を整理し、解説していく。

1. 地蔵信仰について

①の段落は、「円地蔵菩薩縁起」全体の導入部として書かれている。ここでは、数多くいる仏の中でも地蔵は特に慈悲心が深く、それはどんな偉大な菩薩でも敵わないほどであると説かれており、著者・とうくうみょうう等空妙有の地蔵への信仰心の深さが窺い知れる。この記述の根底にあると思われるのが、地蔵信仰という形態の信仰である。では、地蔵信仰とは一体どのようなものであろうか。

地蔵信仰の起源は、古代インドの地母神（大地の生命力を神格化したもの）への信仰にあるといわれる。以降、地蔵は衆生を浄土へ導く救世主として捉えられるようになり、3世紀末には中国に流入して庶民の信仰を得た。日本への伝来は7世紀初めから8世紀初めと考えられるが、確証はない。平安時代には末法思想（末法になると仏の教えが衰滅するとの思想）と浄土教（阿弥陀仏を信じて念仏を唱えれば、極楽に生まれることができると説いたもの）信仰との結びつきにより、一般庶民にまで広く浸透した。平安から鎌倉時代にかけて『今昔物語集』などの地蔵説話集が作成されたのは、庶民からの需要があったためであり、地蔵信仰が広く語り継がれる一因となったともいえる。

江戸時代には、地蔵は庶民の暮らしにより密着した形態となった。現在にも残る地蔵盆や地蔵流し、初盆での地蔵巡りはすべて地蔵信仰が元になっている。地蔵信仰は町民文化として受け継がれ、人々の間に浸透していたのである。

このように、地蔵信仰は古代から現在にいたるまで人々の信仰を集め、伝えられてきた。等空妙有をはじめ、「円地蔵菩薩縁起」の中のすべての登場人物が地蔵を信仰の対象として捉えていたことを念頭に置いて読んでみると、信仰の歴史への理解がより深まるのではないだろうか。

2. 「勘解由小路の地蔵」の誕生

②の段落ではまず、「円地蔵尊」誕生の経緯について記されている。治安年中（1021～1024）に、藤原道長の娘であり一条天皇の後である上東門院の命により、著名な仏師・定朝の手で制作されたという。女院の死後は勘解由小路室町の真乗院に安置された。

地蔵が置かれた勘解由小路町とは、室町通りを中心に、北は出水通りから南は下立売通りまでの区画を指し、京都御苑の西側、平安女学院大学京都キャンパスの北側に位置する町である。

また本文中には、同じく定朝の作として「壬生の地蔵菩薩」が登場する。これは、現在も中京区にある壬生寺の本尊を指しており、ガイドブックのような役割を果たした『都名所図会』（1780年刊）にその詳細が記されている。史料によると、「本尊の地蔵菩薩坐像、長三尺にして定朝の作也」と、定朝によって彫られたとされている。この本尊は残念ながら昭和37年（1962）に焼失し、現在は奈良県の総本山・唐招提寺より新しい本尊延命地蔵菩薩立像（平安時代の作品）が移されている。

この頃はまさしく、地蔵信仰が民衆にも広まり始めた時期であり、それと時を同じくして地蔵が制作されたことが分かる。世間の人々は女院ゆかりの品であった地蔵を大変にありがたがったことであろう。「勘解由小路の地蔵」と名付けられたことも、人々から親しみをもって信仰されていたことの現れかと思われる。

3. 「円の地蔵」の由来

③の段落では、地蔵をめぐる不思議な体験をもとに、「円の地蔵」と呼ばれるようになった興味深い理由が明かされている。承久年間に、ある女性が地蔵に縁結びを祈願していたが、彼女と親しくなることを企んだ法師が地蔵のふりをして嘘を告げたところ、その嘘が好転して、女性はめでたく良き夫と結ばれるという逸話である。話の中で、女性とその夫となる人物が「夢あはせ」をしていることから、「円の地蔵」と呼ばれて、縁結びの地蔵として広く信仰をもたれるようになった。

この地蔵が広く知られていた証拠として、仏教説話集である『沙石集』（1283年成立）が挙げられる。これには「勘解由小路の地蔵」という項目が収載されており、「円の地蔵」の話とは結末に大きな違いがあるものの、それに至るまでの内容は大方同じである。『沙石集』は多数の写本が作られており、地蔵の名は京都のみならず全国各地に広まったと考えられる。ただし、写本はすべて人の手により書かれたものであるため、それぞれに内容が少しずつ異なっている。等空妙有もこれらの写本のうちの一冊を読み、「円の地蔵」について執筆するに至ったのであろう。この逸話が江戸時代に伝わっていることから、地蔵信仰を広く民衆へ普及させるという仏教説話集のもつ役割がよくわかる。

4. 応仁の乱後の「円の守」

④の段落は、応仁の乱で焼失してしまったと思われていた「円の地蔵」が円空上人ほか数人の夢に現れ、無事に発見されて現在の山伏山町の地蔵堂に納められるという話である。その後、地蔵は再び上人の夢に現れて経文を授け、上人がその写しを人々に与えた。それは大変に靈驗あらたかなものであったため、「円の守」と呼ばれるようになったという。

応仁の乱は、京都の町を焼き尽くしたことで知られているが、その大火は地蔵をも巻き込み、一大事件を引き起こしていたようである。地蔵が安置されていた勘解由小路町のすぐ南側には、現在の平安女学院大学が位置していることは先に述べたが、この場所には管領である斯波氏の嫡流である斯波武衛家の屋敷があったとされている。この屋敷は武衛陣と呼ばれ、開戦以前にはすでに搔櫓（^{かいだて}櫓を並べて垣根のようにしたもの）や物見櫓が設けられていたとの記録が残っており、緊迫した状況だったことが分かる。現在は武衛陣町という地名が残っており、女学院前には石碑がたっている。地蔵を取り巻く状況は、非常に逼迫したものだったと想像することができる。

戦乱が収まったのちに、地蔵は現在の地蔵堂へと安置されるに至る。この地蔵堂が、真乗が付けた名前に倣って「真乗院」と名付けられたことは大変に興味深い記述である。地蔵が制作された時期の記録や言い伝えが、人々の信仰心のもとに受け継がれていたことの現れといえるためである。地蔵に祈願するだけでなく、「円の守」として持ち運べる形態となり、人々にとって身近な存在となったことも、地蔵への信仰心や親しみを増すきっかけとなったことであろう。

またこの段落では、「悪い夢をなくして良い夢を増やし、かつすべての災難から免れさせる」ことが地蔵の御利益となっている。先の③の段落では縁結びとして信仰されていたが、④ではそのような記述はなされていない。前者から後者までの約 200 年の間に、人々の願いをより広く受け入れられるように変化して伝えられたのであろうか。これも、信仰心の広がりの意味するものかと考えられる。

5. 近世の「円地蔵尊」

最後の段落である⑤は、等空妙有の考えを最も大きく反映していると思われる文章である。これまでの由来や逸話を受けて、地蔵信仰により得られる功德を説き、忘れられている地蔵への信心を呼び起こしたいと述べられている。尊い地蔵が、再び人々の信仰を集めて親しまれるようにしたいという強い意志を感じることができる。

この中で挙げられている 10 の功德は、延命地蔵菩薩経により説かれている十益^{じゅうえき}と同じ内容である。現在の壬生寺の本尊・延命地蔵菩薩立像でも、信仰によりこれらの十益が授けられるとされている。延命地蔵菩薩立像は平安時代の作と伝わっており、「円地蔵尊」の制作と同時代であることから、「円地蔵尊」においても、制作当初から十益が説かれていた可能性も十分にあり得る。その場合、③や④で書かれている御利益が伝えられる以前から、十益こそが本来の御利益だったのであり、等空妙有はその本来の姿を思い起こさせるために十益の説を引用したとも考えられる。

文中には、地蔵が「長い間市中に埋もれて、広く世の人が知らない」という状況に陥っていると記されている。江戸時代には、地蔵信仰は文化の一部として民衆の間に浸透していたはずであるが、この記述は一体何を示唆しているのか。それは、地蔵盆や地蔵流しという行事が習慣化していく一方で、本来あるべき信仰心がなくなっていったことを意味するのではないだろうか。現代と同じく、地蔵の由来や経文を正しく理解していない状態のまま、人々が集まる場としての性格が強くなっていったと考えることが可能である。この状況に危機感を覚えた等空妙有は、地蔵に関する由来や逸話を集め、新拾遺和歌集を読み解き、古くより受け継がれてきた信仰心を呼び起こそうと思い立ったのであろう。近世における地蔵信仰のあり方が、この「円地蔵菩薩縁起」の執筆につながっていたのである。

この地蔵堂は、山伏山町の東側南の方に南北 1 間・東西 2 間の規模であったが、子 7 月、いわゆる元治元年（1864）7 月の禁門の変で類焼し、翌慶応元年（1865）12 月に番部屋とともに再建願が出された（「乍恐口上書」（1-8））。この禁門の変の類焼によって、地蔵堂の堂守が廃止され、堂守の辻宗兵衛は親類縁者を頼って移転し、明治 6 年 2 月高倉五条富屋町の谷口五郎兵衛の借家人となった（「差入置一札之事」（引出 5-213））。

おわりに

「円地藏尊」のたどった歴史と、地藏信仰の推移を重ね合わせてみると、この地藏が長い歴史の中で信仰の対象として親しまれ、また人々に身近な存在として捉えられていたことが分かった。近世では信仰心が忘れ去られるようになってしまったが、地藏という存在が人々の身近にあったことに変わりはない。それ以前の古い記録が近世まで伝わっていたということがその証明と成り得るし、今日に至るまで「円地藏菩薩縁起」が受け継がれていることもまた、同様の意味をもつのではないだろうか。

【参考】

- ・国史大辞典編纂委員会編『国史大辞典』（吉川弘文館、1979～1997年）
- ・黒田彰・湯谷祐三編『説話文学研究叢書』第3巻校註沙石集（クレス出版、2004年）
- ・石田晴男『応仁・文明の乱』（吉川弘文館、2008年）
- ・塙保己一編『群書類従 合戦部』訂正3版（続群書類従完成会、1979年）
- ・国指定文化財等データベース
<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index>（2020年2月14日最終閲覧）
- ・壬生寺ホームページ
<http://www.mibudera.com/>（2020年2月14日最終閲覧）
- ・国際日本文化研究センター「平安京都名所図会データベース」『都名所図会』2、再刻34頁
https://www.nichibun.ac.jp/meisyozone/kyoto/page7t/km_01_125.html（2020年2月14日最終閲覧）